

国語 (現代文)

東京大学 (前期・文科) 1/4

<総括>

文科	出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間150分
理科	出題数	現代文1題・古文1題・漢文1題	試験時間100分

近代の福祉国家での個人の生を管理する医療のあり方にかわって、ケアという新しいあり方があらわれてきていることを論じた文章。要旨は昨年度よりもつかみやすかっただろう。設問数は、昨年度同様、全体で五つであった。例年通り、設問の意図をしっかりとつかみ、解答の内容を絞り込む力が求められている。

<本文分析>

大問番号	第一問		
出典 (作者)	松嶋健「ケアと共同性—個人主義を超えて」の一節 (松村圭一郎・中川理・石井美保編『文化人類学の思考法』、世界思想社、2019年) 所収		
頻出度合 ・的中等	入試ではほとんど出題されない筆者である。		
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約3350字。昨年より約450字増。		
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)		

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
第一問	社会論	(一)	記述	標準	第三・四段落にある「第一の例」をふまえつつ、傍線部の表現との対応を考える。
		(二)	記述	やや易	傍線部の〈社会から人間への転換〉という内容を、第五・六段落にある「イタリア」の変化の事例をふまえて説明する。
		(三)	記述	標準	「選択の論理」と「個人主義」との関係を、傍線部を含む第九段落の内容から考える。
		(四)	記述	標準	筆者が論じている「ケア」が〈個人の欲求〉に応えるものではなく、何をすべきであり、そのためにはどのような「世界像」が必要になるのかを考える。
		(五)	記述	標準	七年連続で、三問の出題であった。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

様々なジャンルの評論を読み、そのテーマに関する理解を深めるとともに、文章の論理構造をしっかりと把握できるようにしたい。
書くべき要素を的確に捉え、簡潔明瞭にまとめる練習をしておこう。

国語 (古文)

東京大学 (前期・文科) 2/4

<総括>

文科 出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間150分
理科 出題数	現代文1題・古文1題・漢文1題	試験時間100分

オーソドックスな出題であった。

<本文分析>

大問番号	第二問
出典 (作者)	『落窪物語』
頻出度合 ・的中等	頻出出典。
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・やや増加・増加) 約930字。昨年より約80字減。
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
第二問 (文科)	物語	(一)			
		ア	記述	標準	現代語訳。
		イ	記述	標準	現代語訳 (「かは」が反語であることに注意)。
		ウ	記述	やや易	現代語訳。
		(二)	記述	やや難	内容説明 (「しふねがりて」が難しい)。
第二問 (理科)	物語	(三)	記述	標準	現代語訳 (主語を補う)。
		(四)	記述	やや難	内容説明 (「一つ口」の内容を明らかにする)。
		(五)	記述	標準	内容説明。
		(一)			
		ア	記述	標準	現代語訳。
イ	記述	標準	現代語訳 (「かは」が反語であることに注意)。		
ウ	記述	やや易	現代語訳。		
(二)	記述	標準	現代語訳 (主語を補う)。		
(三)	記述	標準	内容説明。		

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

古文を読解する上で必要な知識項目を習得するとともに、文章を一語一語丁寧に読解する訓練をしておくこと。正確な現代語訳をするために、単語・文法の学習を厳密に行っておくことが大切である。また、解答を簡潔にまとめる練習や和歌の学習も必要。

国語 (漢文)

東京大学 (前期・文科) 3/4

<総括>

文科	出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間150分
理科	出題数	現代文1題・古文1題・漢文1題	試験時間100分

例年通り文理共通問題であり、昨年度同様散文であった。昨年度は歴史書からの出題であったが、今年度は硬質な論説文であり、江戸時代の日本漢文からの出題であった。設問数についても昨年度同様に枝問を含めて文科6題、理科5題であった。また設問に関わる部分での送り仮名の省略も昨年度同様3箇所であった。例年通り答案を作成する際に内容を適切にまとめるのは容易ではない。

<本文分析>

大問番号	第三問
出典 (作者)	井上金峨『霞城講義』
頻出度合 ・的中等	稀。
分量 前年比較	分量 (減少・やや減少・変化なし・ やや増加 ・増加) 222字。昨年は216字 (昨年より6字増)。
難易 前年比較	難易 (易化・やや易化・変化なし・ やや難化 ・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
第三問 (文科)	論説	(一)			
		a	記述	やや易	現代語訳。受身形「為…所～」に注意する。
		d	記述	標準	現代語訳。比較形「無…於～」と「便」の意味に注意する。
		e	記述	やや易	現代語訳。「矯」の意味に注意する。
		(二)	記述	やや難	理由説明。「庸愚」の意味に注意し、「斯憂」の内容を的確に捉える。
第三問 (理科)	論説	(三)	記述	標準	現代語訳。選択形「与其…、寧～」に注意する。
		(四)	記述	標準	内容説明。傍線部中の「之」の内容に注意する。
		(一)			
		a	記述	やや易	現代語訳。受身形「為…所～」に注意する。
		c	記述	標準	現代語訳。比較形「無…於～」と「便」の意味に注意する。
		d	記述	やや易	現代語訳。「矯」の意味に注意する。
		(二)	記述	標準	現代語訳。選択形「与其…、寧～」に注意する。
		(三)	記述	標準	内容説明。傍線部中の「之」の内容に注意する。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

本格的な漢文の読解力が要求されているので、基本句形や重要単語の習得と十分な問題演習が必要である。加えて漢文の背景となる思想や歴史などの知識も学んでおきたい。
細心の注意を払って文脈を読み取り、簡潔で過不足のない答案を作成する訓練を怠らないこと。
漢詩もたびたび出題されるので、文科、理科ともに漢詩の対策も必須である。

国語 (現代文)

東京大学 (前期・文科) 4/4

<総括>

文科 出題数	現代文2題・古文1題・漢文1題	試験時間150分
理科 出題数	現代文1題・古文1題・漢文1題	試験時間100分

夏目漱石のエッセイからの出題。文学者や芸術家の随筆が使われるという傾向は、例年どおりだが、明治期の文章が用いられることは非常に珍しい。本文は短い、書き手の思いが直截に述べられている文章ではないため、読解はけっして容易ではない。筆者の心情を問う設問が多いのは近年ではまれである。

<本文分析>

大問番号	第四問 (文科のみ)
出典 (作者)	夏目漱石「子規の画」の全文。初出は1911年(明治44年)「東京朝日新聞」「東京日日新聞」。
頻出度合・的中等	入試では頻出の筆者である。
分量前年比較	分量 減少 ・やや減少・変化なし・やや増加・増加 約1650字。昨年より約930字減。
難易前年比較	難易 (易化・やや易化・ 変化なし ・やや難化・難化)

<大問分析>

大問	ジャンル	設問	設問形式	難易度	コメント (設問内容・答案作成上のポイントなど)
第四問	随筆	(一)	記述	標準	傍線部からうかがえる心情の説明。問われているのが子規の心情なので、傍線部前後の子規の言葉と、画に添えられた歌の内容とを踏まえて説明する。
		(二)	記述	標準	傍線部理由説明。直後にある画についての具体的な説明を中心にしつつ、子規の漱石への思いなども踏まえて解答を作成したい。
		(三)	記述	やや難	傍線部理由説明。基本的には傍線部に至る部分の内容を説明するが、それを傍線部の「微笑」と結びつけるのが難しい。
		(四)	記述	やや難	傍線部からうかがえる心情の説明。最終段落の内容をまとめるが、傍線部の「淋しさ」に該当する内容をどう説明するかが難しい。

※難易度は5段階「易・やや易・標準・やや難・難」で、当該大学の全統模試入試ランキングを基準として判断しています。

<学習対策>

文学者・芸術家のエッセイを含むさまざまなタイプの文章に積極的にふれ、高度な読解力を身につけること。出題者の要求をしっかりと把握し、解答の方向を正確に見定め、答えるべきことをわかりやすく簡潔な表現で自在に説明しうる表現力を養う必要がある。